

北上市在来サトイモ 二子いも のルーツに関する仮説

阿部 弘*

はじめに

岩手県北上市二子町に伝わる 二子いも は、独特の粘りと風味で特産品として知られるサトイモ在来品種である。また、北上市二子町のシンボルとして広く県民に親しまれており、岩手県の秋の風物詩である芋の子会の主役として高い人気がある。しかし、約 300 年と言われる歴史^{2,19,33)}の詳細については、裏付けとなる資料に乏しく^{2,19,26)}、二子町では 二子いも の生産振興と地域の伝統文化再考の点から研究を求める声が強い。

このような背景から、二子町在住で岩手考古学会会長の沼山源喜治氏らが郷土史資料の調査による考古学的アプローチで独自の研究を進めている²³⁾。筆者は、二子いも のルーツが明らかとなれば、特産品 PR においても、品種特性に合致した技術開発においても有用であると考え、農学を中心に、郷土史、民俗学等の各種文献を調査した。それらに、筆者らによる 二子いも 組織培養苗に関する研究で得られた知見を加味して、二子いも のルーツに関する考察と仮説の提示を試みた。

そこで、今後の調査研究の一助となることを願い、現時点で考え得る 二子いも のルーツに関する仮説を報告するものである。

調査方法

文献による調査を主とし、地域の伝承やエピソード等の一部引用した。調査の対象は、以下の 6 項目とした。

1 サトイモの起源と伝搬

種としてのサトイモの起源と伝搬についての一般論を整理し、そこから 二子いも のルーツを推測した。

2 品種比較からみた 二子いも の特徴

二子いも の特徴を、分類済みの各種サトイモ品種と比較し、そこから 二子いも のルーツを推測した。

3 農業統計から見た 二子いも

農業統計から、全国におけるサトイモの作付面積および収穫量を整理し、その中で 二子いも が占める位置からルーツを推測した。

4 二子町の郷土史

二子町あるいは北上市に現存する郷土史料等を調査し、そこから二子いも のルーツを推測した。

5 東北地方におけるサトイモの起源と伝搬

東北地方に点在するサトイモ産地について調査し、そこから 二子いも のルーツを推測した。

6 ウイルス病

サトイモは永く栄養繁殖で維持されてきたため、ほぼ全ての株がウイルスに感染しているとされる。そこで、ウイルスから 二子いも のルーツを探ることができないか考察した。

調査結果および考察

1 サトイモの起源と伝搬

単子葉類サトイモ科サトイモ属の植物のうち、食用とするために栽培されている栽培種をタロイモと総称し、世界的に広く食用とされている。タロイモはインドからマレー半島の熱帯原産地から伝搬したとされるが、日本のサトイモもタロイモの一種であり、最も北方で栽培されている品種群である(図 1)^{6,10,11)}。日本への伝来はイネより早く、縄文時代ではないかと考えられている^{6,10,11)}。それは、考古学的物証には欠けるものの、民俗学的あるいは文化人類学的研究から、その可能性が高いと指摘されている^{29,30,43)}。佐々木は、昭和 30 年代の熊本県五木村において、サトイモを含めた焼畑輪作農耕が行われていること³¹⁾、アジア太平洋地域のサトイモ文化が稲作文化に推移していく様子³¹⁾から推測して、縄文時代には既にサトイモを含む原始的な焼畑農耕が存在し、弥生時代に稲作を受容する受け皿となったのではないかと指摘している³⁰⁾。星川は、山間地でわずかにみられるサトイモ焼畑栽培は、日本渡来以前の古代の栽培方法ではないかと指摘しており¹⁰⁾、日本におけるサトイモ栽培の歴史の長さを伺わせる。前田によると、縄文土器が日本国内にとどまらず、太平洋の島々を経て南米エクアドルまで分布しているのは、縄文人が高度な航海術を身につけていたためとされる²¹⁾。縄文人は、武力に勝る弥生人の渡来以前の平和な時代にも活発に海外へ往来していたらしく、前述の南米ルートのほか、アフリカ方面でマダガス

* 旧応用生物工学研究室(現研究企画室)

カルに至るルートや、ユーラシア大陸で匈奴の一派となり、アジア系ヨーロッパ国のハンガリーに至るルートなどにより、世界中に縄文文化をもたらしたとされる(図2)²¹⁾。さらに前田は、現在日本で栽培されている海外原産の作物である、コムギ、オオムギ、ソバ、コンニャク、そしてサトイモなどが、縄文人の世界的な交易ネットワークの賜物としている²²⁾。このことから、サトイモの伝搬については、「日本への伝来」のみならず「日本からの伝搬」の可能性も考える必要を感じる。イモ類は穀物に比べ腐敗しやすく、考古学的な証拠となる遺物が残りにくい³⁰⁾、今後の新たな遺物発見によりサトイモの伝搬がより詳しく解明されることを期待したい。

ところで、現在の日本で主要なイモ類とされるのはジャガイモとサツマイモであるが、これらの日本への伝来は比較的新しく、それぞれ1601年⁸⁾、1597年⁹⁾とほぼ同時期である。一方、サトイモは今でこそ野菜の根菜類に区分されているが、「万葉集(759年)」や「延喜式(927年)」にその名が見られること⁶⁾、十五夜や正月に団子や餅ではなくサトイモを供える文化が日本各地に点在すること⁴⁴⁾などから、稲作が定着する以前の縄文時代から、ジャガイモ・サツマイモが伝来する近世に至るまで、主食に近い重要な食糧の一つであったのではないかと指摘されている^{7,29,30,44)}。

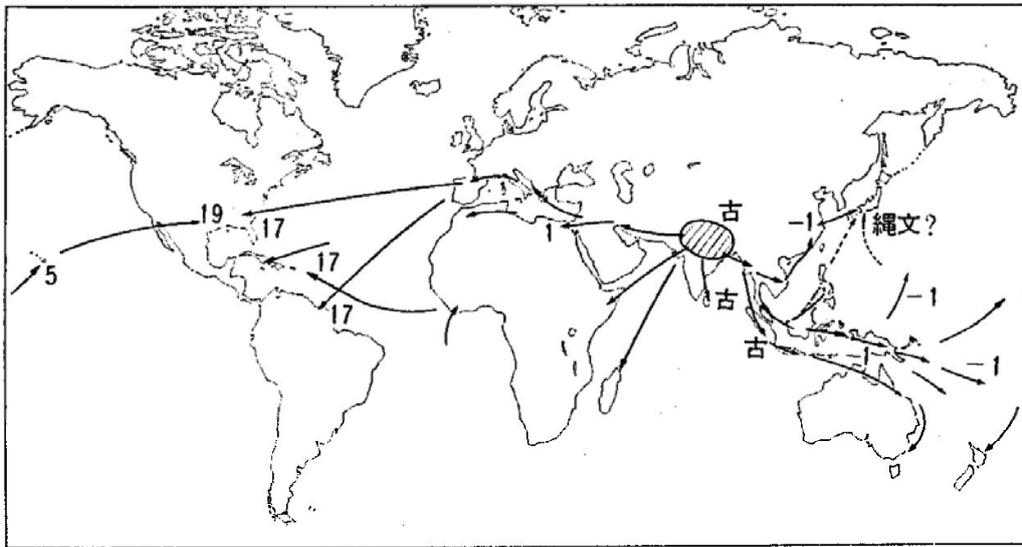


図1 タロイモ(サトイモを含む)の伝搬(星川1980, 新編 食用作物, 養賢堂, p617)⁸⁾

図中の文字および数字は伝搬時期を示す

-1~19 : 世紀

古 : 紀元前1世紀以前の古代

縄文? : 縄文時代ではないかと考えられている

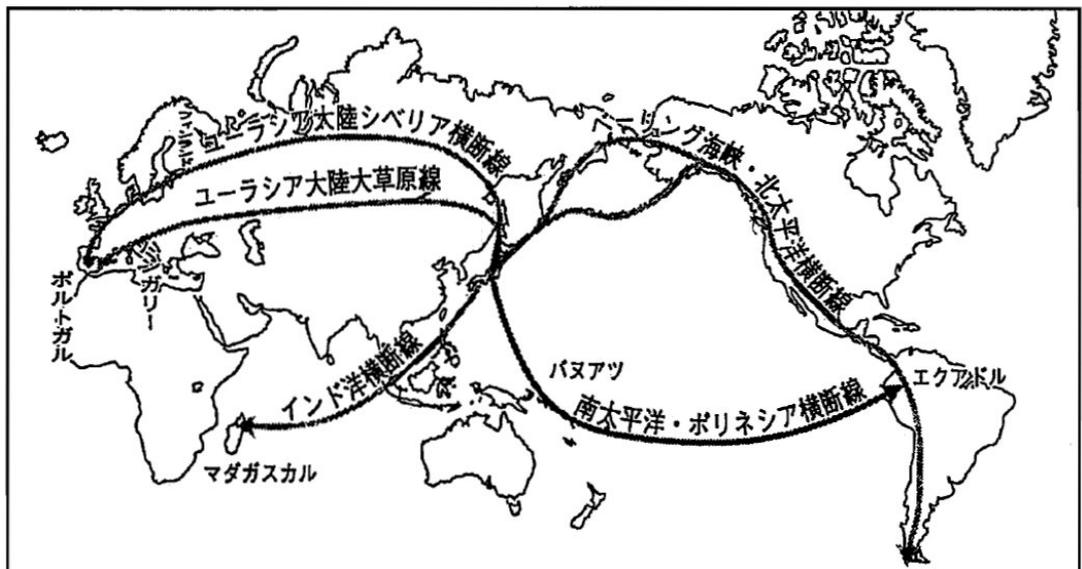


図2 縄文人の世界大移動想定地図

(前田2007, 日経ビジネス人文庫 縄文人はるかなる旅路, 日本経済新聞出版社, p15)^{21,22)}

2 品種比較からみた 二子いも の特徴

(1) 外観的特徴と芋の肉質の比較

サトイモの「芋」はジャガイモと同様に塊茎であり、親芋から子芋、孫芋そしてひ孫芋と分球していくのが特徴である(図 3)⁶⁾。そして利用部位が品種によって異なり、親芋用品種(親子兼用を含む)、子芋用品種(一般に子孫兼用を意味する)および葉柄用品種等に大別される⁶⁾。現在のサトイモの栽培種については、国内では開花が稀であることと大半の品種が3倍体であることから、交雑によって生じた品種はなく、伝来時期や原産地の違いからいくつかの大きな系統群があり、そこから芽条変異によって現在の品種群が形成されたとされる^{6,10)}。熊沢ら(1956)²⁰⁾が提案した15品種群、約35品種という分類の枠組みは、飛高⁶⁾、星川¹⁰⁾らも踏襲しており、日本産サトイモ分類の標準となっている(表1)。

以下、飛高⁶⁾、五十嵐¹¹⁾らによる主要な品種の特性をкаいつまんで紹介する(写真1~6)。土垂 石川早生は全国で最も栽培されている品種群で、多くの地方名が付けられている(写真1,2)。この2品種群は葉柄が緑色であり、孫芋を多く付ける。黒軸(烏播)^{ウーハン} 赤芽は、二子いも同様、葉柄に赤みを帯びた品種群である(写真3,4)。黒軸は、子芋が大きく、肉質が粘質であり、

赤芽は葉柄の色が鮮やかな炎赤色で、芋も赤みを帯び、肉質が粉質である。八つ頭 筍芋は親芋を主に利用し、肉質が粉質である(写真5,6)。

(2) 分子レベルの解析

Isshikiらは、日本産サトイモ58品種をアイソザイム分析によって分類したところ、わずか11にしか分けられなかったことから、日本産品種が比較的少数の祖先型品種に起源したのではないかと指摘している¹²⁾。

さらにIsshikiらは、表1の15品種群のうち、末尾の蓮芋群を除く14品種群について、各品種群内のアイソザイム変異について解析した結果、赤芽群と黒軸群では変異が認められたものの、他の品種群では変異が全く認められないという結果を報告している¹²⁾。

これらからIsshikiらの推察によると、各品種群内の品種間の幅広い形態的変異は主に芽条変異に起源し、赤芽群および黒軸群がそれぞれ起源の異なる複数の祖先型品種に起源したとされる¹²⁾。土垂、石川早生などは多くの地方品種に分化しているにも関わらず分子の変異がほとんどなく単一起源と考えられ、赤芽、黒軸などは品種数が少ないものの分子の変異があり、起源が多様と考えられるのは興味深い。

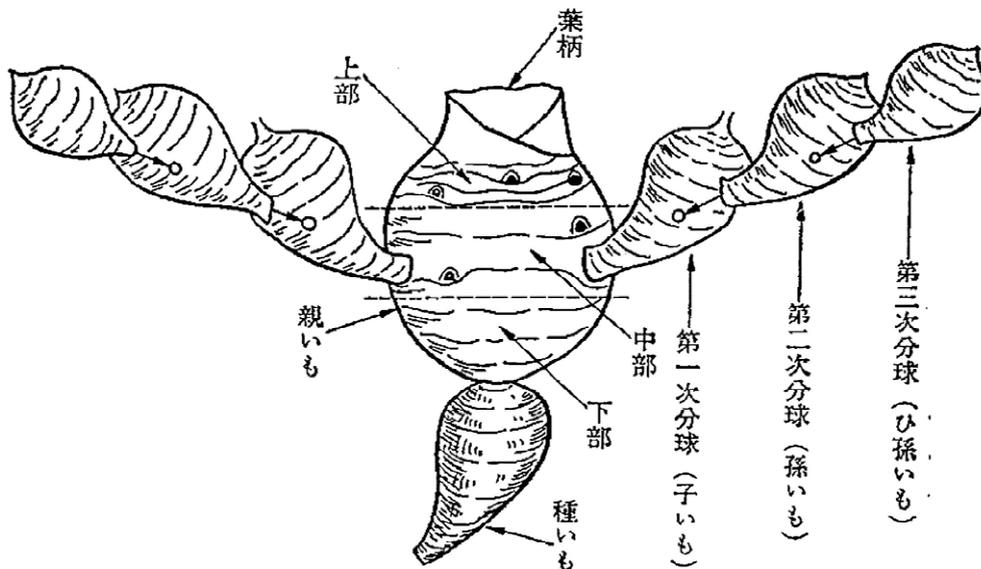


図3 サトイモの分球模式図(飛高1974, 農業技術大系 - 野菜編10, 農山漁村文化協会, p基5)⁶⁾

土垂 石川早生 など一般的な品種では、第一次分球(子芋)が側芽を地上部に抽出して、子芋そのものは長くなり、第二次分球(孫芋)、第三次分球(ひ孫芋)への分球が多くなる。

二子いも の場合は、第一次分球(子芋)が地上部を抽出しにくく、分球しにくい特徴があり、第一次分球(子芋)が大きく肥大する。

表1 サトイモの品種分類(飛高1974⁶⁾, 熊沢1956²⁰⁾)

品種群	代表品種	染色体数	同種異名または類似品種	植物学上の位置	利用部
えぐ芋	えぐ芋	3n	えぐ芋, 稲橋在来, 出雲塩治, とべ芋, 河ずいき, 河内芋, 紀州芋, 島芋, 美作芋, 京都2号, 栗芋, 太芋, 振草, 天王, 団子芋, 盆芋, 青芋, 小鳥, 奉化芋(上海)	<i>C. antiquorum</i> <i>var. typica</i>	分球芋
沖縄青茎	沖縄青茎	2n	沖縄青茎	"	なし
蓮葉芋	早生蓮葉芋	3n	蓮葉芋, 蓮芋, 衣被, 石川早生, 水芋, 草深芋, 八幡芋, 静岡早生, 女早生, 文化芋, 彌市芋, 黄芋, 遠州, 笹倉, 白芋, 大土垂,	<i>var. nymphaeifolia?</i>	分球芋
	中生蓮葉芋	"	日田1号		
石川早生	石川早生丸	"	石川早生, 甲州早生, 文久早生, 白茎京芋, 京芋13, 鈴芋, 渋川, 襟掛芋, 愛媛早生, 丸子芋, 栗田, 深芋, 高座芋, 浅木, 日田早生, 熊野早生	<i>var. globulifera</i>	"
	石川早生長	"	親責, 鶴の子, 八幡芋, 富岡早生, 高座早生, 京早生3号, 在来晩生, 神玉, 東京早生, 早生1本		
土垂	早生丸土垂	"	六月芋, 広島芋, 土垂, 早生芋, 寒残り, 大和, 井桁早生, 愛知早生, 白鳥, 早生丸, ジラ, 北京 A 114(中国), ビヤナン社, コマイカル(台湾), 早生真芋, 豊後	"	"
	早生長土垂	"	蓮葉芋, 伝燈寺, 親責, 赤山芋, 大阪泉南種, 南京 A (中国), シカミ芋(台湾), 鉄砲芋, 吉野芋, 早生芋		
	中生丸土垂	"	早生土垂, 京都早生, 小姫, 六月芋, 白芋, 白早生芋, 白茎早生, 熊野, 中生土垂, 二宮18号, 文山郡ラウ社(台湾)		
	中生長土垂	"	八重蔵, 土垂, 能高郡パーラン社(台湾), 北京 204 (中国), 三州, 御厨, 坂本在来, 鶴の子, 高雄1号(台湾), 上海13(中国), 奉化種(中国)		
	晩生長土垂	"	三保早生, 白芽早生, 白芽晩生, チャマサイ(台湾), ガオガン番社(台湾), 台湾土垂(台湾), 与五郎芋, 上座芋, 中生真芋, 丹蕃, 群蕃, 南湊キテ又社, 東勢郡雲山杭社(台湾)		
黒軸	黒軸	"	黒軸, 早生赤芋, 赤釋, 赤ずいき, 朝鮮(朝鮮)	<i>var. globulifera</i>	"
	水戸黒柄	"	水戸黒柄		
	烏播	"	烏播(台湾)		
	大湖芋	"	大湖蕃マバトワソ社, 大湖郡北勢蕃, マビル八社(台湾)		
赤芽	赤芽	"	赤芽, 鬼赤, 大野芋, 都芋, 沖縄芋	<i>var. esculenta</i>	親芋, 分球芋
	大白吉	"	大吉(セレベス)		
	白茎赤芽	"	赤芽系3		
	青茎赤芽	"	パンガミーロー(台湾)		
	黒茎赤芽	"	黒茎赤芽(屋久島)		
薑芋	薑芋	"	薑芋	"	"
檳榔芯	檳榔芯	2n	檳榔芯(台湾)	"	"
	旗山芋	"	旗山郡マスホワソ社, 旗山郡リキキ社(台湾)		"
	紅檳榔芯	"	紅檳榔芯(台湾)		なし
唐芋	唐芋	"	唐芋, 海老芋, 樋口, 猿芋, ぼどう芋, 籾芋, 高雄2号(台湾), 山形田芋の芽条変異, 吉浜芋の芽条変異	"	親芋, 分球芋
	真芋	"	真芋		
	白茎海老芋	"	白茎海老芋, 吉浜芋, 山形田芋		
	白頭, 大頭	"	白頭, 大頭		
八つ頭	八つ頭	"	八つ頭	"	"
	白茎八つ頭	"	白茎八つ頭		
みがしき	みがしき	"	みがしき	"	分球芋
	ロフト蕃	"	ロフト蕃(台湾)		葉柄
溝芋	溝芋	"		"	"
	赤口	"			
筍芋	筍芋	"	台湾芋	"	親芋, 分球芋
蓮芋	蓮芋	"	蓮芋	<i>C. gigantea</i>	葉柄

熊沢(1956)²⁰⁾は、「同種異名または類似品種」全てに生産県または生産国を記している。

(3) 品種比較から見た 二子いも のルーツ

二子いも は全国に分布している品種群のなかで、数少ない赤茎系統の子芋専用種で、青茎の多い東北地方では唯一の赤茎系統の産地とされている^{2,33)}。赤茎とは葉柄が赤いことを示すが、生育初期には緑色の葉柄の基部に薄くワイン色程度の赤みが差す程度である。しかし、収穫期には葉柄のほぼ全体が濃い黒赤色ないし黒紫色となる(写真7)。土垂 石川早生 等の子芋用品種では、一般に子芋と孫芋のいずれも商品とし、どちらかといえば孫芋が好まれる傾向がある。しかし、子芋専用種

である 二子いも の場合は、孫芋はあまり肥大せず、収量も少ないために好まれず、専ら大玉の子芋が好まれる特徴がある。調理特性について、産地では「独特の粘りと風味があり、柔らかいが煮崩れしない」としている。筆者の推測では、子芋は孫芋に比べて繊維が多いために煮崩れしにくいのではないかと思われる。また、地上部では側芽の発生が少なく、1本立ちであっさりした草姿をしており、孫芋が少ないため、堀上株も混み合わずっきりした姿をしている(写真7)。

また、表1の元となる熊沢らの報告²⁰⁾で挙げられてい

る国産黒軸群品種は、黒軸(徳島)、早生赤芽(静岡)、赤桿(岩手)、赤ずいき(石川)、水戸黒柄(茨城)のみであり、他品種群を通して、当時の熊沢が岩手県産として収集したのは赤桿のみである。また 二子いも は、岩手県のサトイモで古くから最も有名で、県内で赤い葉柄を有する唯一の品種であり、前述した黒軸群の特性と一致することから、二子いも が赤桿であることは明かである。今後、二子いも と他の黒軸群品種を形態・栽培特性の比較や、アイソザイム分析または DNA 塩基配列相同性比較などを実施する機会を得れば、そのルーツに関する研究の進展が期待される。ただし、表1の全品種について十分な情報を得られたわけではなく、サトイモは歴史が古いために産地の規模が小さく、伝統作物として細々と栽培されている場合も考えられ、今後、各地のサトイモについて、より詳細な情報を収集する必要がある。

3 農業統計から見た 二子いも

農林水産省の統計によると^{24,25)}、岩手県は秋田県と共に日本最北の生産県であり、青森県と北海道は農業統計上には登場していない(表 2)。実際には青森県と北海道でのサトイモ栽培が皆無ということではなく、商業栽培を行う産地が形成されていないということと思われる。秋の風物詩として、山形県の「芋煮会」は全国的に有名であり、岩手県と秋田県でも「芋の子会」として秋の行事となっているが、青森県では行事としてサトイモを囲む習慣はないようである。おそらく、サトイモは熱帯原産で生育期間が長いから、青森県以北に産地を形成するのは困難だったと思われる。その一例として、青森県との県境にある現岩手県二戸市において、江戸時代末に豪商であり豪農でもあった淵沢が「軽邑耕作鈔」なる農書を記しているが⁴⁾、このなかでサトイモの栽培方法を紹介しているにも関わらず、同書の解題をしている古沢によると、サトイモ栽培は二戸市に定着していない⁵⁾。淵沢は地域の農業生産性を高めるために、既存品目の技術を整理する一方で、新品目の導入にも意欲的だったようだが、ポリマルチのない時代に岩手県北でのサトイモ栽培は困難だったと思われる。

二子いも の産地である北上市は、市町村別作付面積で全国第 28 位であり、東北では最大の産地である(表 3)。サトイモの商業栽培の北限にあたる岩手県に、これだけ大型の産地があることは特筆に値する。また、北上市の作付面積が岩手県内に占める割合は 43.6%であり(表 4)、岩手県産サトイモと言えば、県内ではまず 二子いも が挙げられ、県外での知名度も高い。表 2 の都道府県別では岩手県は東北 4 位で平凡な順位だが、表 3

の市町村別では、北上市が東北 1 位となっており、二子いも が東北 6 県でも突出したサトイモであることがうかがえる。それゆえ、なぜ古くから北国岩手県北上市の、それも二子町に偏って 二子いも が存在し、栽培されてきたのか、そのルーツは興味深い。また、熊沢²⁰⁾が 二子いも の属する黒軸群に挙げた品種について筆者が調査した範囲では、地元生産県で品種名すら知られていないか、情報が得られないかであり、徳島県、石川県のサトイモ作付面積が、いずれも表 2 で 40 位以下であることなどから、黒軸群は限られた地域で小規模に栽培されているのではないかと現時点では考えている。今後は、生産県に足を運び、丹念に埋もれている情報を収集することが必要と思われる。

表2 都道府県別サトイモ作付面積 (平成 18 年産)²⁴⁾

順位	都道府県	作付面積(ha)
1	千葉	1,990
2	宮崎	1,110
3	埼玉	789
4	鹿児島	782
5	新潟	706
6	熊本	631
7	栃木	630
8	静岡	480
9	神奈川	478
10	茨城	458
11	愛知	451
12	愛媛	390
13	群馬	383
14	岐阜	372
15	福島	352
16	福岡	310
17	大分	305
18	福井	293
19	東京	276
20	山口	208
21	三重	203
22	兵庫	191
23	秋田	184
24	山形	183
25	広島	177
26	岩手	149
27	富山	145
28	香川	139
29	長野	134
30	宮城	128
31	長崎	128
32	京都	127
33	岡山	121
34	滋賀	116
35	島根	116
36	佐賀	115
37	鳥取	111
38	山梨	110
39	奈良	106
40	高知	92
41	徳島	64
42	大阪	53
43	石川	46
44	和歌山	34
45	沖縄	31
46	北海道	-
47	青森	-
	全国	14,400

網掛けは東北・北海道

表3 市町村別サトイモ作付面積
(平成18年産)²⁵⁾

順位	産地(市町村)	作付面積(ha)
1	千葉県 八街市	429
2	千葉県 富里市	236
3	宮崎県 都城市	236
4	宮崎県 宮崎市	222
5	鹿児島県 鹿屋市	208
6	千葉県 山武市	206
7	千葉県 芝山氏	187
8	愛媛県 四国中央市	175
9	埼玉県 所沢市	156
10	福井県 大野市	155
11	新潟県 新潟市	146
12	宮崎県 小林市	142
13	栃木県 鹿沼市	118
14	埼玉県 狭山市	118
15	千葉県 成田市	116
16	新潟県 五泉市	110
17	鹿児島県 和泊町	103
18	千葉県 千葉市	101
19	宮崎県 えびの市	96
20	新潟県 長岡市	93
21	栃木県 宇都宮市	88
22	神奈川県 横浜市	86
23	埼玉県 さいたま市	85
24	群馬県 前橋市	84
25	鹿児島県 曾於市	81
26	大分県 豊後大野市	78
27	千葉県 香取市	72
28	岩手県 北上市	65
29	静岡県 磐田市	63
30	静岡県 浜松市	61
42	秋田県 横手市	49
88	福島県 郡山市	27
106	福島県 会津若松市	23
121	宮城県 蔵王町	20
133	福島県 中島村	18
157	山形県 寒河江市	13

網掛けは東北・北海道

表4 市町村別サトイモ作付面積が都道府県の
作付け面積に占める割合
(平成18年産)^{24,25)}

順位	産地(市町村)	都道府県 に占める 割合(%)
1	福井県 大野市	52.9%
2	愛媛県 四国中央市	44.9%
3	岩手県 北上市	43.6%
4	京都府 京丹後市	27.6%
5	秋田県 横手市	26.6%
6	鹿児島県 鹿屋市	26.6%
7	富山県 南砺市	26.2%
8	大分県 豊後大野市	25.6%
9	鳥取県 鳥取市	25.2%
10	広島県 福山市	22.0%
25	宮城県 蔵王町	15.6%
67	福島県 郡山市	7.7%
74	山形県 寒河江市	7.1%
81	福島県 会津若松市	6.5%
101	福島県 中島村	5.1%

網掛けは東北・北海道

4 二子町の郷土史

二子いも の赤茎・子芋専用種という形質が全国的にも非常に珍しいことは前述したとおりであるが、この独自の品種がどのように二子町に伝わり定着したのか、史料に乏しく未だ明らかにされていない²⁶⁾。1831年(天保2年)に記された「二子物語」には当時の野菜として「芋」という言葉が記されており、これが現在のところ、

二子いも が文献に登場した最初とされる(写真8)^{14,15,23)}。

二子いも のルーツは二子町の歴史と密接な関わりがあると思われるが、二子町は愛郷心の非常に強い土地柄で、前身の二子村であった頃から、他村に先がけて郷土史が著されている(表5,写真8~10)。天保2年(1831)に川端理翁(通り名とされ、実名は川端地区の肝入であった富岡理平治と言われている)によって「二子物語」が著されているが、江戸時代に一農村からこのような書物が著されること自体、極めて稀ではないかと思われる。また、約80年後の大正2年(1913)には鈴木により「二子村誌」が刊行されている。佐々木²⁸⁾は活版印刷の村誌は当時の和賀郡内では例がないとしており、おそらく全国的にも珍しい事例と思われる。その後、昭和後期から二子小学校 PTA を始めとする有志によって「二子物語(一)~(三)」および続編の「二子風土記(四)~(六)」が刊行されている。以下、「二子村誌」を中心に二子町の歴史をなぞりつつ、二子いも のルーツを考察してみることにする。

二子村は平安時代は安倍氏の所領であったが、鎌倉時代始めに源頼朝の庶子とされる和賀忠頼を祖とする和賀氏の所領となった。以降、二子城(飛勢城)を居城として栄えたが、豊臣秀吉の奥州仕置きで所領を没収され、約380年にわたる和賀氏の治世が幕を閉じた³⁵⁾。その後、二子村として南部藩に属したが、明治の町村合併後も独立した一村として持続してきた³⁵⁾。和賀氏の居城であった二子城(飛勢城)の城跡は、現在公園となっている。二子村は江戸時代の一農村と前述したが、二子城が長く栄えていた和賀氏の治世では和賀藩の中心地であった。その名残と思われるが、そう広くはない現二子町内には、社、お堂、祠がそこかしこに点在し、地区ごとに独自の神楽が伝承されている。現在でも、二子町で毎年9月末に催される「いものこまつり」では、10以上の神楽が披露される。このような歴史性が、この地域独自の自尊心、愛郷心の根底にあるのではないかと推測される。また、筆者が知る範囲では、二子町民から伊達、南部両藩への郷愁があまり感じられないが、その背景には、和賀氏が両藩の狭間で没落していったという思いがあるのか

もしれない。二子町に和賀氏の居城があったことと、二子町に全国的にも珍しいサトイモ品種 二子いも の長い歴史があることは、何らかの関係があるのかもしれないと筆者は考えている。

二子村の地勢は、「耕地の大部は、掘ること数尺、砂礫に達すること往々あり、思ふに北上の河道、本村を貫きし時代ありしなるべし。」³⁷⁾と「二子村誌」に記され、地形的には河川と丘陵で囲まれた砂壤土の肥沃な低地である³⁷⁾。当時の統計で約760haの面積のうち、耕地は畑地が最も多く(42.7%)、水田はその半分強(25.9%)であった(図4)³⁶⁾。当時の二子村の農産物生産額では米が最も多く(36.9%)、米に次ぐのがサトイモつまり 二子いも (13.0%)であった(図5)³⁸⁾。明治末には既に重要な換金作物であったことがわかる。

また、二子いも は当時から行事を彩る大切な作物であり、8月15日の「鎮守祭」では初物のサトイモを食し、「名月に対して、名物の里芋を食ふ、花も団子も併せ得たり」とある³⁹⁾。また、9月13日には「芋名月」という行事があり、「芋に腹鼓を打つ、此日は、また辨財天の祭日なり」と「二子村誌」に記されている³⁹⁾。坪井によると、このような風習は全国に点在しており⁴⁴⁾、地域によっては古くからサトイモが重要な作物であったと考えられる。いずれ、明治大正時代の二子村にとって、二子いも は経済的にも文化的にも欠くことのできない重要な作物であったのは間違いない。

当時の二子村民の気質について、「二子村誌」には「一般に保守的傾向を有す、故に動もすれば社会の進運に遅るゝ嫌あり、表面勤勉の民たるが如きも、進取の気象に乏しく、農事の如きも、相伝の土地に粘着し、旧習を慣用して改良発達をはからず」と記されているが³⁹⁾、同じ「二子村誌」のはしがきで「人誰か郷土を愛せざるものあらん」と書き始めている³⁴⁾。鈴木は愛する二子村の発展を願って止まず、村民にもっと進歩的であって欲しかったのではないと思われる。しかし逆説的に考えると、このような保守的な土地柄で、忠実に先祖からの土地と技術と種芋が脈々と受け継がれてきたからこそ、この寒冷地でサトイモの独自品種を絶やすことなく維持して来られたのではないだろうか。肥沃な土地で古くから開墾の進んだ二子村は、現北上市内の旧南部藩各村の石高では上位に位置する優れた農村であった¹⁸⁾。しかし、面積的には明治大正時代の和賀郡で最小であり¹⁷⁾、既に開墾の余地がほとんどなかったため「相伝の土地に粘着」せざるを得なかったと思われる。そういった背景の中で、限られた大切な農地、昔ながらの栽培技術と共に子孫に伝えてきた種芋には、先人達の思いが詰まっているように

思われてならない。

現在の二子町では、二子いも を地域特産品として更に発展させるために新しい取組みを始めようという気運が盛り上がりつつある。我々研究側が胆に命ずべきは、二子いも は一つの地域特産を超えた存在であり、二子町の風土・歴史・文化に深く根差した地域のアイデンティティであるということだろう。

表5 二子町(旧二子村)の歴史・文化に関する文献

書名	著者	刊行年
二子物語	川端理翁	1831(天保2年)
二子村誌	鈴木隆太郎	1913(大正2年)
二子物語(一)	二子小学校PTA	1980(昭和55年)
二子物語(二)	二子物語編集委員会	1982(昭和57年)
二子物語(三)	〃	1989(平成元年)
二子風土記(四)	二子風土記編集委員会	1990(平成2年)
二子風土記(五)	〃	1992(平成4年)
二子風土記(六)	〃	1994(平成6年)

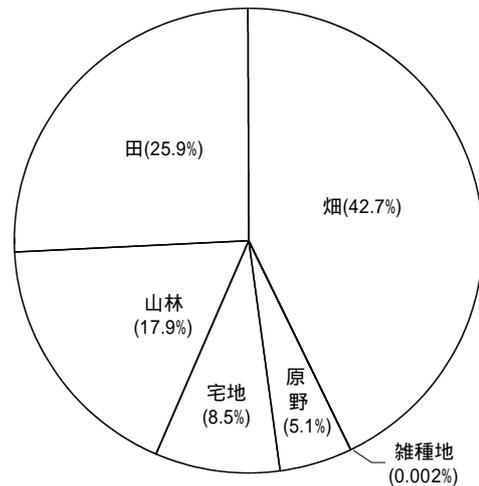


図4 旧二子村の土地構成(明治42年, 鈴木³⁶⁾)

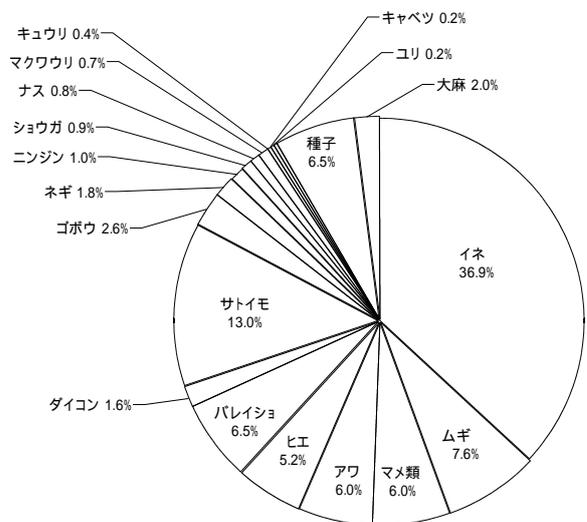


図5 旧二子村の農産物生産高割合(明治42年, 鈴木³⁸⁾)

5 東北地方におけるサトイモの起源と伝搬

二子いも が伝わったとされる約 300 年前といえは南部藩帰属後の江戸時代前期と思われるが、興味深いのは山形県の芋煮会の始まりと岩手県盛岡市在来のサトイモ「津志田芋」の伝来がやはり約 300 年前とされる点である。烏兎沼によると、山形県の風物詩として全国的に有名な「芋煮会」の起源は、元禄年間(1688-1703)の山形県中山町とされる⁴⁵⁾。最上川のほとりにある中山町は当時船着場として栄えていたが、京都方面から荷物を運んでいた船頭たちが、その河原で地元の里芋と、運んできた棒鱈とを煮て食べたのが芋煮会の始まりとされている⁴⁵⁾。烏兎沼はまた、愛媛県の秋の風物詩である「イモたき」が山形県の芋煮会と類似していることを指摘しており、船運を介した山形、京都および四国の交易に芋煮会のルーツの一端を求めようとしている⁴⁵⁾。

二子町も北上川ほとりにあり、すぐ南の黒沢尻河岸に黒沢尻御蔵が置かれた慶安元年(1648 年)頃から南部藩最南端の回米積み出し基地として賑わいを見せていた¹⁷⁾。黒沢尻は交易の要所で、問屋の手で小舟に積み替えられた荷が上流の盛岡方面へ運ばれたが¹⁷⁾、「津志田芋」の産地である現盛岡市津志田地区を始め県内の主な産地である一関市、紫波町はいずれも北上川沿いにあることから(表 7)²⁶⁾、川舟によってサトイモが広まった可能性が考えられる。山形県のサトイモ生産者からの伝聞であるが、サトイモ栽培で 3 年目頃から現れるという連作障害が、川沿いの砂壤土では 4, 5 年連作できるという。それが本当ならば、サトイモ産地が川沿いに多い理由の一つとなるかもしれない。

また、陸路でサトイモが伝搬したことも考えられる。現在の秋田県横手市山内は約 270 年の歴史と言われるサトイモの産地であるが、黒沢尻から陸路で横手・秋田方面へ運ばれる荷もあったことから¹⁷⁾、黒沢尻・二子経由で山内にサトイモが伝わった可能性も考えられる。二子町には全国的にも貴重な一里塚が現存する街道筋で、陸路の面でも交通の要所であったが¹⁶⁾、幕末の記録では、古くから盛んだった日本海海運と陸路をつなぎ、山形経由で京都方面と交易していたとされ¹⁶⁾、そこから推測すると、二子いも のルーツを山形、京都に求めることも可能かもしれない。なお、北上(黒沢尻・二子)～山形

ルートの通過点である宮城県蔵王町もサトイモ産地であり、同町を含む宮城県刈田地方は、和賀氏の初代忠頼が没した地とされている⁴⁰⁾。

以上のように、二子町・黒沢尻を中心に交易ルートを辿るとサトイモの産地が点在しており、その歴史が 300 年と前後している点は非常に興味深い(表 6)。

表7 県内サトイモ作付面積上位5市町村(小原1991)²⁶⁾

	1位	2位	3位	4位	5位
市町村	北上市	一関市	都南村	盛岡市	紫波町
面積(ha)	75	19	13	12	10

6 ウイルス病

国内のサトイモは種子繁殖を行わずに全て栄養繁殖で維持されてきた^{6,10,11)}。そのため、サトイモモザイクウイルス(DasMV)に全ての株が感染しているとされ、他にキュウリモザイクウイルス(CMV)の感染が知られており(表 8)、両ウイルスともアブラムシ虫媒で病名はサトイモモザイク病である^{3,27,32,41,42,46)}。ただし、CMV の感染は一過性とされ種芋で翌年に伝染しないとされている。このような例は栄養繁殖作物では例外的であり、代表的な例としてサトイモとコンニャク(サトイモ科コンニャク属)に CMV が感染する場合が取り上げられる。以上より、サトイモに感染するウイルスで実質重要なのは DasMV である。

表8 サトイモに感染するウイルス

	サトイモモザイクウイルス(DMV)	キュウリモザイクウイルス(CMV)
サトイモへの感染状況	自然条件では全て保毒	一過性で経年伝染しない
虫媒伝染	有(アブラムシ)	有(アブラムシ)
種芋伝染	有	無
宿主植物	サトイモ科のみ	多犯性で宿主範囲が非常に広い
病徴	葉脈に沿って帯白色の退緑条斑を形成。病徴によっては稲妻状やネット状に見える。	葉脈に沿って黄色モザイクまたは大型で縦長の黄色病斑を形成

表9 サトイモ科植物の代表的な種

単子葉植物綱	Liliopsida
サトイモ目	Arales
サトイモ科	Araceae
(作物)	サトイモ(タロイモ)、コンニャク
(鑑賞)	ミスバショウ、ヒトデカズラ、クワズイモ、ボトス、カラー
(雑草)	カラスビシャク、ザゼンソウ、テンナンショウ

表6 東北地方におけるサトイモの伝来についての言い伝え

品種など	品種群	起源	地域	地勢
二子いも	黒軸群	約300年前	岩手県北上市二子町	北上川沿い
津志田芋	土垂群	"	岩手県盛岡市津志田	"
「芋煮会」	"	"	山形県中山町	最上川沿い
山内芋	"	約270年前	秋田県横手市山内	奥羽山麓
(参考)「芋炊き」	(未調査)	約300年前	愛媛県大洲市	肱川沿い

DasMV の宿主範囲は極めて狭く、サトイモ科に限定される(表 8)。すなわち作物ではサトイモとコンニャクのみであり、他には外来の観賞用のカラー、ポトス、ヒトデカズラなど、自生するものではミズバショウや雑草のザゼンソウなど、種類はそれほど多くない(表 9)。

以上より、二子いもは、DasMV と古くから共存関係を維持してきたものと考えられる。また、DasMV は宿主植物がサトイモ科に限定され、種類が少ないことから、ウイルスの伝搬経路を推定しやすいものと考えられる。ウイルスは一般に、同一種であっても、系統によって遺伝子塩基配列が異なるので、二子いも由来 DasMV と、国内品種、海外品種およびサトイモ科植物全般から分離した DasMV とで遺伝子塩基配列を比較することで、二子いものルーツを推測可能と思われる。

7 二子いものルーツに関する仮説(総合考察)

ここまでの考察をまとめると、二子いもは、黒軸群に区分されることから、まず同群に属する国内各地の品種と比較するべきと考えられる。しかし、前述したとおり、黒軸群についての情報収集が思うように進んでいない。筆者は、全国のサトイモ研究者との交流を通じて、今後さらに情報収集に力を入りたいと考えている。

そのうえで、二子町に伝来した時期と経路を推測すると、まず時期を伝承のとおり約 300 年前とすれば、江戸時代が安定期に入り、河川輸送が発達した時期である。当時の交易ルートから推測すると、まず、江戸方面から奥州街道か太平洋海運を経て、北上川を遡上してくるルートが考えられる。また、山形方面から宮城経由の陸路も考えられ、烏兔沼によると、山形は海路で京都や四国と繋がっており、愛媛県の名物「イモたき」の起源が約 300 年前とされ、芋煮会と類似性があるとしていることから⁴⁵⁾、四国～京都～山形～北上(黒沢尻・二子)というルートの中で二子いもが伝わってきた可能性が考えられる(仮説 1)。

一方で、交易ルートによる仮説だけでは説明の難しい点がある。二子いもは、筆者らの試験栽培によると、株当たり収量で約 400g 程度と決して高くはないが、土垂は株当たり 800g 以上収穫可能で約 2 倍の差があった。産地でも、土垂などのほうが明らかに多収と認めている。これは、二子いもが子芋専用種であり、孫芋で収量を稼げないことから、株当たり 10 個程度に限られる子芋に、株当たり収量が依存するためと考えられる。また、子芋専用種で孫芋の数量が増えにくいことは、種芋確保の難しさにも繋がり、二子いもは栽培面積の約 2 割を種芋用に当てている。

このように、二子いもには栽培上不利な条件が多く、それに対して、東北のサトイモ産地で栽培される品種の中心は土垂群である(盛岡市、横手市、寒河江市等)。土垂群の特徴は、比較的低温耐性があり、種芋の貯蔵性がよいことである¹¹⁾。更に孫芋の着生肥大が旺盛で、収量性が高いため、東北各地で栽培されていると考えられる。川舟と陸路の交易ルートからいえば、盛岡市の津志田芋(土垂群)は交易の要所であった黒沢尻を通過して北上川を上った可能性があり、横手市の山内芋(土垂群)は黒沢尻経由の陸路で運ばれた可能性がある。つまり、土垂は黒沢尻にも伝わった可能性が高く、黒沢尻のすぐ隣で、サトイモ産地である二子村(当時)がその土垂を見過ごすことはないはずである。二子いもと土垂を比較栽培したのなら、現在ほど食糧事情が安定していない当時ならば、栽培上有利な土垂を選ぶのが自然と思われる。敢えて栽培上不利な二子いもを選択した理由は、既に地域の文化として重要な位置を占めていたからではないかと思われる。

以上より、二子いものルーツが口伝されている約 300 年より、もっと以前に遡る可能性もあるのではないかと考えられる(仮説 2)。

次に、品種比較に着目すると、二子いもが黒軸群に属することから、前述したとおり国内の黒軸群との比較が必要である。もしその結果、国内にルーツを見いだせなければ、さらにルーツを遡り、中国方面、東南アジアおよび太平洋地域に起源を求める必要が生じるかもしれない。筆者らは二子いもの組織培養苗に関する研究を報告しているが^{1,13)}、そのなかで特に興味深かったのは、培養当代株の子芋を越冬貯蔵した培養 1 作球株が慣行種芋株に対して、他品種と見まごうほどの著しい大型化を示したことである。この大型化は翌年には慣行種芋と変わらなくなったため、遺伝的変異ではなく一時的な生理現象と結論づけた。しかし、このような一時的な大型化は土垂を含む他の品種では報告がない。筆者は、一時的な大型化の原因として、寒冷地で低温抑制を受け続けてきた二子いもが、培養を経ることで低温抑制が解除され、一時的に熱帯原産地での生育に近い生育相を現したのではないかと推測している。すなわち、二子いもは徐々に寒冷地適応しつつ北上してきた品種ではなく、一気に北上して運ばれてきたのではないかと、そのため、受動的に寒冷地適応せざるを得なかった、元来暖地系の品種ではないかと推測している(仮説 3)。

今後、多くのサトイモ品種について、培養 1 作球の大型化の有無を検証できるならば、推論を進めつつ、仮説の真偽を検証していけるかもしれない。また、二子い

もを熱帯で栽培するとどのような栽培特性を示すのかも興味深い。

以上はとりあえずの暫定的な仮説に過ぎないが、これらの検証を試みることで、二子いものルーツの真実に少しでも近づくことが筆者の願いであり、それは、二子いものエピソードと生理生態に関する情報をもたらし、生産振興と技術開発の双方に役立つと考える。前述した、アイソザイム分析や遺伝子塩基配列の相同性比較を含め、国内外のサトイモ品種と二子いもを比較することは、有意義なことと考える。

摘要

岩手県北上市二子町に伝わる在来サトイモ品種二子いものルーツおよび品種分類上の位置は、産地である二子町においても明らかではない。そこで、各種文献調査を試みたところ、二子いものが黒軸群に分類されることが明らかとなった。ルーツについては、明らかにすることはできなかったが、現時点の調査結果を整理し、とりあえず以下の仮説を提示する。今後、これらを検証する過程で、二子いものルーツが明らかとなるよう期待する。

- 1.(仮説 1) 二子いものは、江戸時代が安定期に入り、河川流通が盛んになった約 300 年前に、江戸方面から北上川を遡上してきたか、四国・京都方面からの海路と、山形・宮城経由の陸路をつないで、二子町に伝来したのではないか。
- 2.(仮説 2) 二子いものは東北地方で一般的な土垂群に比べ、株当たり収量が低く、約 300 年前の同時期に両品種が伝わったとすれば、二子町のみが二子いもを選択したことが説明できない。従って、二子いもの二子町への伝来は、現在定説とされている約 300 年より以前に遡るのではないか。
- 3.(仮説 3) 二子いも組織培養苗の栽培特性とその経年推移を追跡評価したところ、培養当代株の子芋を越冬貯蔵した培養 1 作球株が、著しい大型化を示した。こういった現象は、土垂など他の品種では報告がなく、二子いも特有の現象と思われた。筆者の推測では、二子いもはもともと寒冷地に向いているのではなく、本来は暖地系の品種であり、徐々に寒冷地適応したのではなく、短期間に二子町に伝わり、強い生育抑制を受けて、現在の二子いもの特性が形成されたのではないか。

謝辞

本研究を行うに当たり、二子さといも生産者組合の及川正則氏、小原紀美也氏、高橋正典氏他には貴重な種芋を提供いただき、二子いもにまつわるエピソード等を賜った。また、岩手考古学会会長の沼山源喜治氏には北上市中央図書館所蔵の古文書「二子物語」を閲覧させていただき得難い機会を賜り、二子町振興協議会二子地区交流センターにおいてセンター長の滝澤良徳氏、事務長の及川正男氏には「二子村誌」以降の郷土資料を快く閲覧させていただいた。また、本論文執筆に際して、岩手県南広域振興局花巻総合支局の阿部潤農林水産調整主幹、岩手県農業研究センターの千葉泰弘環境部長、鶴田正明技術部長、赤坂安盛病害虫防除部長および古川勉企画管理部長には有益な助言を賜った。記して感謝の意を表する。

引用文献

1. 阿部弘・阿部潤(2009), 北上市在来サトイモ二子いも組織培養苗の栽培特性とその経年推移, 園学研 8 (3): 印刷中(2009.1.9 受理)
2. 阿部隆(2003), 二子サトイモ, "都道府県別地方野菜大全", 芦澤正和監修, 農山漁村文化協会 東京, pp. 23-24.
3. 荒井啓(1983), サトイモモザイクウイルス, "植物ウイルス事典", 與良清・斎藤康夫・土居養二・井上忠男・都丸敬一編, 朝倉書店 東京, pp. 316-317.
4. 淵澤圓右衛門(1847), 軽邑耕作録, "日本農書全集", 農山漁村文化協会(1980) 東京, pp. 3-136.
5. 古沢典夫(1980), 軽邑耕作鈔・遺言・解題, "日本農書全集", 農山漁村文化協会 東京, pp. 170-255.
6. 飛高義雄(1974), サトイモ(基礎編), "農業技術大系-野菜編 10", 農山漁村文化協会 東京, pp. 基 3-11.
7. 星川清親(1978), サトイモ, "栽培植物の起源と伝播", 二宮書店 東京, pp. 118-119.
8. 星川清親(1980), 第 32 章 ジャガイモ, "新編 食用作物", 養賢堂 東京, pp. 559-586.

9. - , 第 33 章 サツマイモ, "新編 食用作物", 養賢堂 東京 . pp. 587-616 .
10. - , 第 34 章 タロイモ, "新編 食用作物", 養賢堂 東京 . pp. 616-626 .
11. 五十嵐勇(1998), サトイモ, "地域生物資源活用大事典", 藤巻宏編, 農山漁村文化協会 東京 . pp. 150-153 .
12. Isshiki S. , N. Nakamura, Y. Tashiro and S. Miyazaki (1998), Classification of Cultivars of Japanese Taro [*Colocasia esculenta* (L.)Scott]by Isozyme Analyses, 園学雑誌(J.Japan.Soc.Hort.Sci.) 67(4) : 521-525
13. 岩手農研セ応用生物工学研究室(2003), さといも「培養苗」「培養いも」の特性とその経年推移, 試験研究成果書(岩手農研セ) : (研)-21
14. 川端理翁(1831), 二子物語
15. 北上市(1983), 北上市史第九巻(近世七), 北上市史刊行会 岩手 . pp. 367-380 .
16. 北上市(1987), 第 5 章 近世 第 4 節 宿場町のにぎわい, "北上の歴史", 北上史談会 岩手 . pp. 193-200 .
17. - , 第 5 章 近世 第 5 節 盛んであった北上川舟運, "北上の歴史", 北上市編 岩手 . pp. 200-215 .
18. - , 第 8 章 近世 第 5 節 諸産業の発展, "北上の歴史", 北上市編 岩手 . pp. 200-215 .
19. 北上市(2008), 秋の味覚 旬をいただく, 広報きたかみ 422 : 2-5
20. 熊沢三郎・二井内清之・本多藤雄(1956), 本邦における里芋の品種分類, 園学雑誌. 25. 1 - 10.
21. 前田良一(2007), 第一章 南米への旅 - 南太平洋・ポリネシア横断線, "縄文人はるかなる旅路", 日本経済新聞出版社 東京 . pp. 15-90 .
22. - , 第六章 日本列島発・世界への道, "縄文人はるかなる旅路", 日本経済新聞出版社 東京 . pp. 371-410 .
23. 沼山源喜治(1992), 二子物語, "二子風土記(五)" : 78-88
24. 農林水産省統計部(2008), 3 都道府県別の作付面積・収穫量・出荷量(7)さといも, "平成 18 年産野菜生産出荷統計" : 56-57
25. 農林水産省統計部(2008), 6 市町村別の作付面積・収穫量・出荷量(7)さといも, "平成 18 年産野菜生産出荷統計" : 168-169
26. 小原房雄(1994), さといも, "岩手の野菜いまむかし", 高橋慶一編著, 熊谷印刷 岩手 . pp. 165-171 .
27. 小室康雄(1973), 22 サトイモ, "野菜のウイルス", 誠文堂新光社 東京 . pp. 241-247 .
28. 佐々木政蔵(1989), 発刊によせて - 「二子物語」にこめられた情念 - , 二子物語(三) , 二子物語編集委員会編 : 3-4
29. 佐々木高明(1971), 照葉樹林文化と焼畑農耕文化, "稲作以前", 日本放送出版協会 東京 . pp. 26-32 .
30. - , 縄文農耕論をめぐって, "稲作以前", 日本放送出版協会 東京 . pp. 33-85 .
31. - , 稲作以前の農業, "稲作以前", 日本放送出版協会 東京 . pp. 88-194 .
32. 下山淳(1993), サトイモ, "原色 作物ウイルス事典", 土崎常男・栃原比呂志・亀谷満朗・柳瀬春夫編, 全国農村教育協会 東京 . pp. 428-430 .
33. 菅原達郎(1994), 北上市のさといも, "岩手の野菜いまむかし", 高橋慶一編著, 熊谷印刷 岩手 . pp. 249-251 .
34. 鈴木隆太郎(1913), はしがき, "二子村誌"
35. - (1913), 第一 沿革, "二子村誌" : 1-2
36. - (1913), 第三 土地, "二子村誌" : 3-5
37. - (1913), 第五 地勢, "二子村誌" : 7-10

38. - (1913), 第六 生業産物, "二子村誌":
11-14
39. - (1913), 第十一 風俗民情, "二子村誌":
23-32
40. - (1913), 第十五 和賀家の事, "二子村誌"
: 61-97
41. 田中寛・嘉儀隆・中首根渡・木村裕(1981), サトイ
モモザイク病に関する研究 - Dasheen Mosaic Virus の
分離と同定 - , 大阪農技セ研報 18 : 27-36
42. 遠山明(1984), 1.35 サトイモ, "野菜のウイルス病
- 発生生態と診断・防除 -", 北島博編, 養賢堂 東
京 . pp. 315-323 .
43. 坪井洋文(1979), 柳田国男の農耕文化論, "イモと日
本人 - 民俗文化論の課題", 未来社 東京 . pp. 20-42 .
44. - , 畑作文化の確認, "イモと日本人
- 民俗文化論の課題", 未来社 東京 . pp. 203-264 .
45. 烏兎沼宏之(1981), 山形の名物芋煮会のはじまり
考, 中山町藻南文化研究所 山形 .
46. 與良清(1983), サツマイモ・サトイモなど, "植
物ウイルス事典", 與良清・斎藤康夫・土居養二・井上
忠男・都丸敬一編, 朝倉書店 東京 . pp. 88-90 .



写真1 品種「土垂」(撮影：磯島・近藤)⁶⁾

品種群：土垂，倍数性：3n
 子芋と孫芋を利用する。
 肉質は粘質¹¹⁾
 葉柄は緑色。

写真2 品種「石川早生」(撮影：磯島・近藤)⁶⁾

品種群：石川早生，倍数性 3n
 子芋，孫芋を利用する。
 肉質は粘質¹¹⁾。
 葉柄は緑色。



ウーハン
 写真3 品種「烏播」(撮影：近藤・磯島)⁶⁾

品種群：黒軸，倍数性：3n
 子芋と孫芋を利用する。子芋が大きい¹¹⁾。
 肉質は粘質¹¹⁾。
 葉柄下部が黒紫色。

写真4 品種「赤芽」(撮影：近藤・磯島)⁶⁾

品種群：赤芽，倍数性 3n
 親芋，子芋および孫芋を利用する。
 肉質は粉質¹¹⁾。
 葉柄は炎赤色。



やつがしら
 写真5 品種「八つ頭」(撮影：磯島・近藤)⁶⁾

品種群：八つ頭，倍数性：2n
 親芋と子芋が結合して塊状となる。
 肉質は粉質¹¹⁾。
 葉柄は赤紫色。

写真6 品種「筍芋」(撮影：磯島・近藤)⁶⁾

品種群：筍芋，倍数性：2n
 親芋を利用する。
 肉質は粉質¹¹⁾。
 葉柄は濃緑色で、葉柄頸部は赤色。

上記写真提供：磯島正春氏(株のアップ)，近藤武由氏(草姿)

出典："農業技術大系 - 野菜編 10"，サトイモ(基礎編)口絵ページ，農山漁村文化協会 東京。



写真7 二子いも

品種群：不明，倍数性：不明
主に、大きな子芋を利用する。
肉質は粘質
葉柄は黒赤色～黒紫色

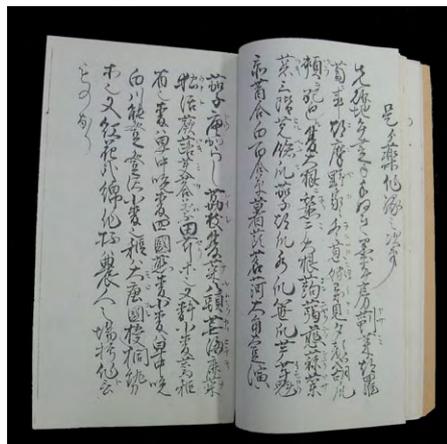
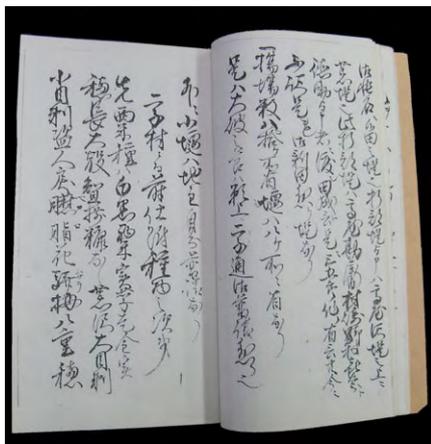
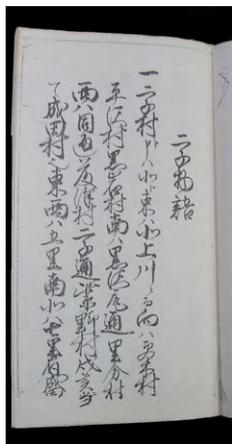


写真8 川端理翁著「二子物語」(1831, 天保2年)¹⁴⁾

左：冒頭，中：「二子村」の文字(左から4行目)，右：「芋」の文字(右から5行目)

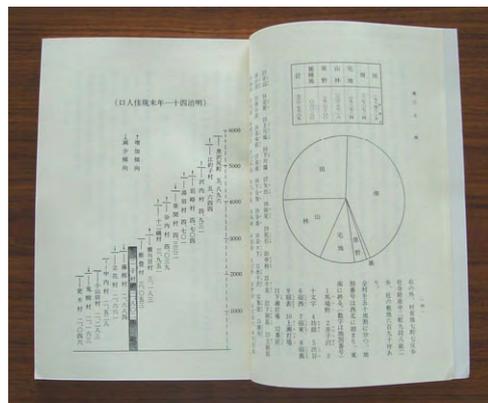
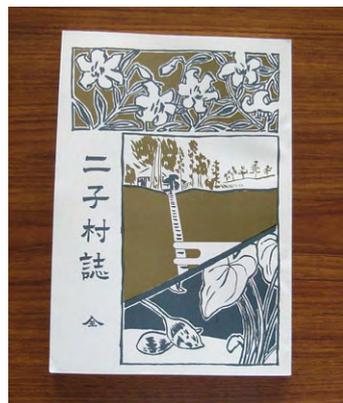


写真9 鈴木隆太郎著「二子村誌」(1913, 大正2年)³⁴⁻⁴⁰⁾

左：表紙，右：本文



写真10 「二子風土記(四),(五)²³⁾, (六)」